

いつまでスキナー頼みか：ケンブリッジ学派以後の政治思想史方法論  
(日本政治学会研究大会 分科会C-3 (2018.10.14) 報告用資料)  
犬塚 元(法政大学法学部)

## 1 問題の所在

### ■政治学の「方法論的転回」のなかの政治思想史研究(p.1)

- ・「方法論的転回」：KKV、因果、法則、「説明」
- ・政治思想史から政治思想・政治哲学の分離
- ・「政治思想史外し」

### ■思想史方法論の「知の空白」(p.2)

- ・1990年代半ば以降からの停滞【p.2】
- ・想定される3つの原因【p.3】

1

## ■本稿の目的 (p.3)

- ・学問史・思想史的分析による「知の空白」克服
- 1) スキナーの方法論の歴史的脈化・相対化
    - ・実証主義的・近代主義的だったのか
    - ・ポストモダニズムに「転向」したか
  - 2) ポストスキナー世代の方法論の解明
    - ・M・ベヴァー Mark Bevir、A・ブロー Adrian Blau
- ・思想史方法論についていま何を論じるか
    - ・われわれは実際に日々よい研究と悪い研究を判別しているが、その規準はどのようなものか
    - ・テキスト解釈においてなにをなすべきか、なにをなすべきでないか。解釈を正当化するための方法や手続はどのようなものか

2

## 2 スキナーを脈化する

### ■モダニズムからポストモダニズムへの転向？(p.5)

- ・『政治のヴィジョン』(2002)での大幅な修正
  - ・「ポスト経験主義」「ポスト分析哲学」「全体論(ホーリズム)」という自己形容【p.5】
- ・歴史学化をめざしたスキナーの方法論は、「実証主義的」だった？



出典 <https://www.gmu.ac.uk/history/our-staff/academic-staff/profiles/skinnerquentin.html>

3

### ■行為の非因果的説明(p.6)

スキナーは、人文社会科学における因果的説明の妥当性をめぐる論争を脈として、行為の非因果的説明のひとつの形態を示すという方法論的関心のもとに、思想史方法論を論じていた【pp.6-9】

- ・「動機」とは区別される「意図」の解明による行為の「説明」(「ポスト実証主義的」問題関心)

### ■スキナーの変化と連続性(p.9)

- ・3つの変化(系譜学的転回、イデオロギー・権力・レトリックへの注目、複数の読み方受容)
- ・複数の知的系譜、カ点の変化
  - ・コリングウッド、オックスフォード哲学、ラスレット

4

## 3 ポストスキナー世代の思想史方法論

政治思想史研究の現在の状況と課題に応答する、スキナーとは別様の、対照的な2つの思想史方法論

### 3-1 マーク・ベヴァー：「ポスト・反基礎付け主義」の思想史【p.12】

#### ■『思想史のロジック』の反響(p.12)

- ・多くの学術雑誌での特集
- ・「人間科学」の基礎たる思想史研究
  - ・社会を理解するためには人間の意図の理解が不可欠であり、人間の意図は個別的・歴史的に分析しうるのみ
  - ・「真珠探しの政治思想史」批判



出典 <http://pollisci.berkeley.edu/people/person/mark-bevir>

5

### ■ポスト分析的な歴史理論 (p.12)

- ・思想史というディシプリンにふさわしい推論形式(正当化と説明のためのロジックの形式)をわれわれが思想史研究で用いている概念のセットから哲学的に解明
- ・「反基礎付け主義的哲学の伝統を思想史のロジックへ拡張」、「ポスト分析哲学の歴史理論」

### ■客観主義と相対主義への両面批判(p.13)

- ・基礎付け主義を退けつつ、いきすぎた「反基礎付け主義」(相対主義・懐疑主義)を批判
- ・基礎付け主義と相対主義の両方に陥らない客観性(知識)のあり方を探究【p.13】

6

■信念の共時的・通時的説明としての思想史研究 (p.14)

- 「手続き的個人主義」
  - 思想史研究が対象とするのは「作品の意味」だが、だれかにとっての意味があるだけで、テキストそのものには意味はない
  - 受容理論の部分的受容(「意味」の拡張)
- 著者にとっての意味は、「表明された信念」

■「ポスト・反基礎付け主義」の思想史研究 (p.15)

- 反基礎付け主義の時代における思想史研究の哲学的前提を分析的に解明【p.15】

7

3-2 エイドリアン・ブロー:不確実性の時代の思想史研究のハウツー【p.16】

■KKVのインパクト:不確実性の制御 (p.16)

- 「不確実性を評価せずに行う推論は、科学ではない」(KKV)をふまえた思想史方法論【p.16】
- 不確実性を減らす・報告するための「推論のロジック」
- 「不完全決定性」:単一のエヴィデンス(それにもとづく検証・反証)では不足。トライアングレーション



出典 <https://adrianblau.wordpress.com/page/2/>

8

■「テキスト解釈の科学」(p.17)

- レオ・シュトラウス批判
- 「テキスト解釈の科学」:テキスト解釈者も、意識的かどうかはともかく、多くの場合にすでに科学(推論のロジックとしての科学)を実践

■実践的なハウツーアプローチ (p.17)

- これまでの思想史方法論は、研究の意義や価値ばかりを論じ、実際のハウツーが欠落
- 論文「刑事捜査としての政治思想史」(2015) 編著『分析的政治理論の方法』(2017)
- 非歴史的アプローチの再評価、方法論の対立を架橋すべきこと【p.18】

9

4 いくつかの示唆

■「ポスト・ポスト実証主義」という学説史的ステージ (p.19)

- 実証主義か否かという課題はスキナー世代

■「歴史研究としての政治思想史」の拡張と修正 (p.20)

- 意味や解釈をめぐるスキナーの狭い理解を拡張
- 歴史的手法と哲学的手法の協働
  - ある手法を特定ディシプリンに帰属させる誤り
- 他者理解としての過去のテキストの理解
  - それを無視すること、appropriateすること

10

■方法論のコンフェッショナリズムを越えて (p.20)

- 方法が研究のよい悪いを決めるわけでない
- 方法やアプローチを越えたよい悪いの規準
- 異なる方法やディシプリンへの全稱的な攻撃は、健全なアカデミズムを破壊する研究不正

■ハードアカデミズムの擁護 (p.21)

- 方法論(どのように)でなく、有意性をめぐる議論(なぜ、なんのために)に過剰応答してないか
- 専門家集団が専門家集団のために論じるテーマとしての方法論(その「知の空白」の意味)

© 2018 INUZUKA Hajime

11